



### 出雲焼

出雲には松江藩の初代松平直政の時代から八束郡津山楽山（現松江市）に陶器窯があったが、いっこうに振るわない。そこで二代目綱隆が振興さすべく良工を求めた結果、隣国の毛利家といろいろ交渉のすえ、倉崎権兵衛を士分扱いに優遇してようやく楽山窯に迎えることに成功した。

権兵衛は延宝元年（一六七三）から前後十八年間、楽山窯に従事して、その初代となったが、権兵衛の技量が非凡であったため、楽山焼初代というよりも、権兵衛個人としてのほうが名が高く一家をなしている。

彼は茶碗百個を作っても気に入らなければ九分までも叩き割ったとさえいわれる良心的作家であったから、その真作の伝世するものはいたって少ない。

伊羅保写を得意とし、作品は無銘であるが、轆轤の牙え、竹節高台の豪壯、脇取の削り方など、どこかに個性がにじみ出ている。元禄七年（一六九四）ごろ、六十歳

前後で没したといわれる。

### 楽山焼

楽山焼の初代権兵衛の次代を愛弟子加田半六が継いだ。この人も名工だったが、四代目になってようやく不振をきたしたので、ときの茶伯松平不昧侯が、萩焼で修業を重ねた長岡住右衛門を抜擢して五代目に据えた。

住右衛門は号を空齋といい、楽山焼中興の祖といわれる。文政十二年（一八二九）七十三歳で没した。

二代目住右衛門（楽山焼六代目）から楽山とか空齋の印を用いるようになり、以来空味を称して現在にいたっている。

出雲焼はだいたい小砂まじりの土で、多く朝鮮物を写して、どこか小器用にできている。

多くは無地物であるが、ときに簡単な鳥や静物の絵があると、「絵出雲」と特称しているのは絵秋同様である。

### 布志名焼

明和元年（一七六四）同国八束郡福富村（現出雲市福富）の船木与次兵衛が、布志名に開窯したもので現在におよんでいる。出雲に行なわれているば、ば、茶の茶碗などを作っている。

今一人土屋善四郎がある。宝暦ごろ前記住右衛門と前後して楽山窯に従事したが、のち布志名へ移転して焼物に従事、土風炉の製作などもあり、のちには仁清風の釉掛け軟陶も焼いている。

### 因久山焼

因幡国八頭郡中村大字久能寺に窯があり、因久山焼とも久能寺焼ともいわれる。

明和のころ、京都から初代清水六兵衛が招かれてこの地にきて、尾崎次郎右衛門、芦沢与兵衛の兩人に製陶の技を教え、享和から文化年間にかけて、信楽から勘藏、